

棚尾まちづくり事業

平成 24 年 3 月 28 日（水曜日）

第 9 回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など

江戸時代棚尾村の村勢、棚尾の郵便、棚尾の食など

2 テーマ 17 「棚尾における俳句の隆盛と句碑」

(1) 説明（小笠原幸雄、磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 連絡事項・情報交換など

4 次回日程

史跡めぐり 4 月 3 日（火曜日） 午前 10 時から 12 時頃まで 八柱神社集合
雨天決行

第 10 回 4 月 24 日（火曜日） 午後 7 時から
「大正天皇大嘗祭の歌碑」「棚尾町役場高札舎」

第 11 回 5 月 23 日（水曜日） 午後 7 時から
「秋葉山常夜灯」「棚尾村道路元標」

「棚尾における俳句の隆盛と句碑」

1 要旨

大正 3 年（1914）永井賓水が俳句の回覧誌アヲミを全国の会員に向けて発行し、昭和 17 年（1942）まで続く。その間、俳句の重鎮ホトトギスの高浜虚子が二度にわたり棚尾を訪れ、俳句熱を高めた。又、藤井達吉もアオミの表紙絵を描き、文を寄稿する等故郷を励まし続けた。

2 棚尾の句碑

現在、棚尾地区内には句碑が次のように 6 箇所残っている。

(1) 永井賓水（ひんすい）

八柱神社に「初明り 吉良の横山 眉の如」建立 昭和 25 年文化の日

建立者 碧南市観光協会 及び

若宮町の自宅に「今日の日の 悔いなく暮れし 端居かな」建立 昭和 20 年初冬 建立者 不詳の計 2 基がある。

(2) 古久根蔦堂庵（ちょうどうあん）

妙福寺に「大いなる 蘆の入日や 月を待つ」建立 昭和 16 年 5 月

建立者 門人有志がある。

(3) 鈴木花蓑（はなみの）

妙福寺に「白魚の 漁り火となん 雪の中」建立 昭和 30 年 9 月

建立者 碧南市観光協会がある。

(4) 鈴木天涯（てんがい）

光輪寺に「仰臥して 壺中の天地 蟬時雨」建立 昭和 46 年 7 月

建立者 鈴木静（妹）がある。

(5) 高木二九（ふく）

光輪寺奥庭に「本堂は 山のごとしや 日短か」建立 昭和 53 年 5 月

建立者 光輪寺同行有志がある。

※ 句碑の移動

斎藤虹夢（こうむ）の句碑「天朝の 一の魚板を 打ちにけり」は棚尾本町の自宅にあったが、改築の時に市内下州町地藏院へ移された。

3 参考文献

- (1) 碧南文化協会誌 碧南文化
第 42 号 グループめぐり 俳句の部
第 60 号 碧南探訪 ホトトギス以前 文：高木二九
第 61 号 碧南探訪 釈法蓑 文：高木二九
第 96 号 碧南句碑めぐり（一）花蓑句碑 文：斎藤虹夢
第 97 号 碧南句碑めぐり（二）賓水句碑 文：小沢杜童
第 98 号 碧南市句碑めぐり（三）蔦堂庵句碑 文：磯貝葛葉子（勝義）
第 178 号 永井賓水と俳誌アヲミ 文：永井千秋
- (2) 賓水の文芸活動の軌跡—主として俳句（俳誌「アヲミ」を通して）
著作、発行：永井千秋
- (3) コミュニティ・マガジン「みどり」No.62 平成 20 年（2008）夏号の人物探訪
永井賓水 文：石川繁治氏
- (4) 「写生の鬼 俳人鈴木花蓑」 昭和 54 年発行
著者：伊藤敬子 発行：中日新聞社
- (5) 碧南市史第二巻 俳句 教育と文化 文学と芸術 俳句
- (6) 碧南市文化財第 8 集「碧南いしぶみ集」平成 5 年 1 月発行
碧南市教育委員会
- (7) 「碧南俳句集」市制 20 周年記念 昭和 43 年 4 月 5 日発行
碧南俳句集発行委員会
- (8) 「愛知の文学碑」 碑に見る文学史 昭和 54 年 5 月 15 日発行
著者：吉田弘 (株)愛知県郷土史資料刊行会

4 永井賓水とアヲミ

- (1) 永井千秋氏「碧南文化」の文から抜粋

永井賓水は本名四三郎といい、明治 13 年（1880）大浜町下之切材木問屋磯貝兵七の四男として生まれた。兄国太郎（碧潭・棚尾小学校第二代校長）、弥一郎と共に秀才の誉れ高い兄弟であった。同 28 年（1895）15 歳で大浜小学校教員。同 39 年（1906）

棚尾村永井嘉四郎の娘きくの婿養子となった。昭和5年(1930)新川小学校を最後に35年間の小学教員を退職。同年8月大浜三鱗練炭会社に入社、同17年脳出血発病、翌年退社、以後句作三昧の一生を送り、同34年(1959)79歳で死去。

以上が父四三郎の略歴であるが、これからは俳人賓水として一生を文芸の道に歩んだ跡を伺うかがうことはできない。父は大変几帳面な性格を持ち、古くからの記録を大切に保管していたので、それらをもとに俳人としての概略をおってみたい。

最も初期の活動としては明治35年10月大浜同志会により創刊された「同志の友」という小冊子がある。彼は当時22歳、若輩ながら清新の気に満ちた小文が多数紙面を飾っている。彼は12歳頃より兄碧潭の指導を受け、小碧と号して漢詩を作っていたらしいが、誌上では漢詩よりも小文を表し、文士たらんとしていた様子がうかがわれる。又、熱田神宮禰宜栗田広治より和歌を学び、久成と号し短歌が、又、三楽の号で俳句が載っている。この三楽号は彼の死後、一生の句友光輪寺住職高木二九師引導による戒名に三楽院積賓水と記された。

彼が青年時代、既に文芸に激しく傾倒していたことは、この小冊子に単に寄稿者としてではなく発行の実務にも関わっていたことが、多数の寄稿者の原稿が拙宅に遺存されていることから推測される。後年彼が、一生を通じて、結社の主幹、俳誌の刊行活動を基盤とした文芸活動をしたことが、この青年時代に既に芽生えていたように思われる。

次の活動は大正初期(大正3年)に複写紙による回覧形式の小冊子の発行がある。ここでははっきり俳句がターゲットとなっていてアヲミと誌名が付けられている。編集から筆記、発送迄彼独りの手になるもので、B5 50ページにも及び、その努力には驚くほかない。会員数70名に及び、東北、中部、西部の三巻に分冊、全国に回覧する程であった。

これに先だち彼は明治40年頃より俳句を岡崎の植田石芝に学び、後に東京の岡野知十の十風会に入り、大正2年より高浜虚子に師事、以来ホトトギス一辺倒の一生を送ったのだが、この時期の俳句にはまだ多くの疑義があったようで、明治41年1月、句会というものに初めて出席、「社頭松」という題にて

「初明り 社頭の松の 木ずゑより」

という句を吟じたとあるが、約十年後大正6年正月に吟じた、

「初日待つ 大衆に枝垂る 宮の松」

の句と比べ興味深い。ホトトギス初入選が大正3年

「病床に 冬の日ざしや 客のあり」

となっている。

俳誌アヲミは謄写版袋綴じB5のささやかな小冊子として第1号が大正10年7月発行された。巻頭言中、「……碧海の一角に立った広々とした大濤の一点となった時、……心の底から熱い涙の滲れ出るを止めることができません。アヲミはその涙の痕です。」とある。誠にこの言の如く以後のアヲミの足跡は賓水の涙と共にあったといえる。

「五月雨て 海只白き 月夜かな」

の句がみえ、二九の名がみえる。第9号より活版刷となった。この間の経緯は花蓑、たけし氏等の援助によったことが誌上で分る。

昭和7年2月120号にて休刊になるまでの十年間、アヲミは着実に成長した。この間、賓水はその創作活動の最盛期を迎え、実に目ざましいものがあった。虚子を頂点とし、素十、秋桜子、風生氏等々の中央俳壇とも花蓑、たけし氏等を通した太いパイプで直結したかの感があり、鬼城、爽雨、柳人、草城等々全国著名俳人との交流も頻繁となり、一地方の田舎俳人達の小結社、碧海吟社（アヲミ発行所名）は今や全国に三河俳壇ありとまでの名声を得る迄となった。特に花蓑と藤井達吉のアヲミへの思い入れには特別なものがあった。

しかし、賓水のアヲミ発行についての辛苦は余人のうかがい知れないものがあった。経済的な行き詰まりと長男真小生（本名正生）の死去による打撃により休刊に追い込まれたとみてよい。同12年（1937）3月雌伏五年再びアヲミは復活し、同17年（1942）11月戦時の統合により自爆という辞を使つての廃刊に至るまでの通刊189号。アヲミは賓水の分身であり、三河俳壇の一大拠点であった。

アヲミを失った後の彼は病を養いつつ、只俳句一筋の余生を送った。戦中、戦後の混乱期にも一心俳句のみで誠に壮絶と言えよう。同24年ホトトギス同人に推され、市内八柱神社境内に句碑が建てられ、長年の斯の道への精進がむくわれたといえよう。

(2) 永井千秋氏「文芸活動の軌跡」から抜粋

ここで、絶対忘れてならないことは、妻きくの献身についてである。一生を通じて、いかなる逆境の時も、笑顔を忘れず愚痴一つもらさず、彼を支え続けた。彼女なくして、俳人賓水は有り得なかつたと言っても過言ではない。

きくも棚尾小学校の教員で、大正3年に父と一緒に職員写真が残っていて、共働

きの夫婦が同一校で勤めているのが面白い。

教員を15年間で辞めた後、光輪寺の幼稚園の保母として勤めた。

又、子供もよく手伝い、長女登代子、二女美代子、三女弥生の三姉妹が母と共にアヲミ発行の裏方を務めた。

(3) 藤井達吉の励まし

先に記したように、達吉のアヲミへの思い入れには、特別強いものがあった。

ア アヲミ 100号記念特集に寄稿「アヲミよ、ようも生きてみてくれた、お前なればこそだ、お前の生存の意義は知る人は知る。」

イ 「今行き詰まった句作編集を開く鍵は、勇気丈である。捨て身だ、野人だ、……」

(4) 高浜虚子の來棚

第1回 大正11年(1922)12月20日

光輪寺で句会を開催、アヲミの表紙の題字を虚子が揮毫し、達吉が表紙絵を描く

第2回 昭和3年(1928)9月29日

花蓑に誘われ二度目の來棚、達吉も同行し、衣ヶ浦に十六夜の無月の舟を出し、賓水宅を訪ねた。

(5) アヲミ同人

最盛期には国内外から五百人余の投句があり、その内、棚尾の同人には鳶堂庵、二九、荷芳、光浴、杜童、虹夢らがいた。

(6) 俳句以外の功績

ア 賓水は新川小学校校歌の作詞者である。

一	衣ヶ浦の	潮とおく	世界の隅に	通うべし
	進みてうまぬ	心もて	広く知識を	みがかばや
二	たたえて深き	碧海の	萬水にごり	注ぐとも
	一味となりて	澄む如く	人たる徳を	修めばや
三	伊吹のおろし	楽ときき	荒ぶる波を	友として
	腕もはだも	くろがねの	かたき体を	きたえばや
四	ああ我が校の	名は重し	日に新しき	新川の
	流れはつきず	とこしえに	清き誉を	掲げんかな

イ 「棚尾小唄」の作詞は賓水、鳶堂庵の合作である。

歌詞は第1回例会に掲載したので省略。

5 古久根蔦堂庵

(1) 「碧南いしぶみ集」から抜粋

明治 20 年 (1887) 生 碧南市弥生町 3 丁目 50 番地に居住、同地において料亭「西村屋」を経営した。その後時世が悪く、昭和 15 年に廃業する。家業の傍ら俳句に入り、高浜虚子に師事し、「ホトトギス」同人となる。俳友には賓水、冷石があり共に交流・研鑽した。また、蔦堂庵の門人も多く居た。昭和 33 年 (1958) 1 月に没し、享年 71 歳。

(2) 磯貝勝義氏「碧南文化」の文から抜粋

蔦堂庵氏は本名を古久根喜一とって棚尾に住居、正業は屋号西村屋と呼んで料理屋であった。晩年これを廃止し化粧品店に転業せられたが、それは妻の受持つ仕事であって、それには余り係はず、虚子先生の「花鳥諷詠」の横額をかかげ専ら俳諧の日を送って居られ、其の当時は直弟子の私と故長田丸石君（後に有旦と改名）が共に師事添削を得によく門をたたいたものである。

作句を初められたのは蔦堂と名乗り明治 43 年頃からと聞いて居る。近住の先輩永井賓水氏に学び其の後併せて花蓑氏を師として居られたが、氏なきあと松本たかし氏に師事し、もとより虚子先生を俳聖と仰ぎ、両先生の自宅へ弟子を連れて訪問し、直接の指導を請われた事も度々であった。其の当時の作句にも

「在りし日の 親とも師とも 花蓑忌」

中途、蔦堂庵と改名せられたが、自家の抱え妓全員に俳句を作らせると同時にその同輩妓にも奨め俳句をつくらせるなど、熱心さに感心させられたものであった。其の当時の女弟子の内でも現在立派な俳人として碧南市に住んで居られる、榊原右太代及び玉置ふみ女氏等がそれで、後進の指導にも努力を続けてこられた。生活句の代表句と思はれるのは

「羽織着て 花鳥賊料理 むたりけり」

「泣きし目と 思はるゝ妓の 初鏡」

氏の性格は一本気なところがあって、我々弟子にとって恐ろしく思われるほど厳しいことも度々であった。

晩年は特に信仰心が強くなり

「端居して 霊界あるを うたがはず」

「怒らざる こと念願に 冬籠り」

といふ様な心境ともなり、近親の進める医化学は余り信用せず昭和 33 年 (1958)

1月10日中風が急変し臥床数日にして72歳を以って他界せられた。

句碑は昭和16年5月直弟子長田丸石、榊原右太代、玉置ふみ女、小笠原つねを、磯貝葛葉子、杉浦葭舟と岩田としを氏その他十数名発起人となり、花蓑氏句碑の有る碧南市棚尾の妙福寺に石工であった丸石氏の作によって建てられて居る。場所は花蓑氏の句碑の位置から丁度反対側の山門を入り直ぐ左に曲がって突当たりの角、小さな弘法堂と御茶所の間に在り、ここには一本の寒椿が在って、年毎によく花を咲かせている。

「寒椿 咲いて鳶堂 句碑も古^{ふる}り」 葛葉子

又昭和34年4月15日直弟子の企画で虚子先生の長文の序文を以て古久根鳶堂庵句集一本が刊行されてゐる。

6 鈴木花蓑

(1) 「碧南いしぶみ集」から抜粋

本名 鈴木喜一郎 俳号花蓑（はなみの）知多郡半田町（半田市前明町14）で明治14年（1881）12月1日に生まれる。

半田・名古屋裁判所を経て大審院書記となった。碧南市源氏町にて昭和17年（1942）11月6日に没。高浜虚子の直門、ホトトギス同人、同派の重鎮をなした。また、俳誌アヲミの援助者で同誌の雑詠選者として棚尾俳壇・三河俳壇の興隆に尽くした。「鈴木花蓑句集」がある。

(2) 斎藤虹夢氏「碧南文化」の文から抜粋

碧南句碑めぐり 花蓑句碑

鈴木花蓑氏の句碑は、碧南駅より県道を東へ徒歩にて約八分、名刹毘沙門天を安置する妙福寺境内にある。本堂と毘沙門堂の間にて、本堂寄りの隅に高さ約1.5米、根府川石のちよっとくねった木の幹の様な恰好で約40センチ位の台石の上に南面している。

昭和30年（1955）9月碧南市観光協会の手によって建てられたもので、側に楓の木等二三本あり、うっかりすると見落とす場所にある。碑にある

「白魚の漁り火となん雪の中」

の句は、時の観光協会長杉浦敏一氏の発想により氏の掛け軸の実物大転写である。

花蓑氏は碧南市の対岸半田市の出身で、最初半田市に住み、裁判所に勤めながら高浜虚子のホトトギス俳句の投句をしていたが、俳句上達は虚子の住む東京に限る

と上京し、大審院に勤める傍ら虚子の膝下で作句修行をし、ホトトギス同人になったのである。円本時代の日本文学全集俳句編にも作品がのっている。

大審院を定年退職後（昭和 16 年頃）碧南市に住むようになったもので（その頃の棚尾町字源氏 42 番地、現大島奥市氏宅—藤井達吉翁生誕の地）碧南市は故郷半田に近く、俳句の上での親しい友があったからで、又夫人の知人が居住していた事にもよる。

元来碧南の地は今更言うまでもないが、大正中期頃まで市の東を流れる矢作川には白帆が上下し、その川口又は北の方油ヶ淵等では白魚が豊に捕れたもので、時折、句友の招きで来碧（その頃の棚尾町）したり、通行の途中立寄ったりすることのあった氏は碧南の句を多く残した。句碑の句はその代表的なものであった。

昭和 22 年 4 月東京の笛発行所から花蓑句集が刊行された。当時の事とてあまりよい紙質ではないが 120 頁ばかりの季題別に編集された手頃のものである。碧南市制 20 周年記念句集にも氏の句が故人として載っているが、皆氏を知るものの記憶にある句である。氏は短軀角張った顔で晩年は常に顔が左右に軽くゆれていた。昭和 17 年（1942）11 月長田光浴国手（故人）に見守られながら 64 歳で碧南の地に永眠された。

「鳥屋女房 芸者上りか 何かだらう」

「明治節 属吏となりて二十年」

「梅に浮く 雲に心の なしとせず」

等列举すれば限りもないが、句碑にある句の如きは氏の俳境を知る上に最も適切な句であろう。

(3) 高木二九氏「碧南文化」の文から抜粋

釈法蓑

謄写刷りのアヲミ誌が出て、賓水さんの必死の努力は活字版となり、無理の上に無理して続けられた。雑誌選者もたけしさんから花蓑さんに継がれ、花蓑さんはマア同郷（半田出身）のよしみで鞭撻されました。自ら「花は紅、柳は緑」の写生に専念され。

「夕かげの ずんずん見えて 蟬涼し」

「あじさいの 浅黄のまゝの 月夜哉」

「大霜や 不二は黄色に 日の当り」

東京に居て、アヲミを見ては、そのあまりにも駄句揃の雑詠に、涙をうかべ、賓

水の広さは敬服すれどその深さのないこと。蔦堂のせま苦しいこと。(二九は常日頃蔦堂さんに読書を進めたものである) 二九は名吟一句(実は励ましの言葉で、どうかこうか一句) 駄句百句と批評されました。

当時、ホトトギス雑誌に選ばれることは鬼の首でも取ったような気で居るのに、これでは誠になさけないと嘆きかなしみ、出張あればわざわざ立寄って指導されました。

- ◎ 入れごと 棚尾出身の藤井達吉氏は、アヲミ誌を手にして句の良否は兎に角、棚尾言葉丸出しがなつかしいと

昭和 15 年頃より、花蓑さんはどことなく重苦しい思いをされた。お酒のたたりだと人はいいます。戦さも進んできたので、疎開の意もあり、大審院書記の職も辞せられ、郷里に帰らるゝこととなった。そこで、アヲミ同人相談の上、棚尾に迎える事となり賓水其の他が東京に出て、妻女菊さん姪のみち子さん共々刈谷の陸橋も、釣上る思いをして、棚尾の一面に落ち着かれました。(ここは源氏 42 番地で、藤井達吉さんの生誕地で、現在は棚尾保育園長大島氏が住んで居られる。)

- ◎ 入れごと この家の裏に松林があり、小祠が祭られていた。それが、今は無く、ご神体は中山の神明として祭られ、その辺の字名を源氏神明と言います。

花蓑さんはこの家に居て、一步も外出せず、アヲミ同人其の他入り代わり立ち代り立寄り、作句に句評に明け暮れました。私はお逮夜務め、祥月勤めを致しました。

昭和 17 年夏も過ぎて花蓑さんはいよいよ病い重く棚尾の町も見ずに時雨暗き 11 月 6 日逝去されました。ご縁によって、私が大導師として葬式をすることになりました。法名はすぐ^{ほうさ}釈法蓑と思ひ浮かべましたが、さて院号は、まさか、時計院、振子院(花蓑さんのあだ名は、人呼んで時計といたしました)でもあるまい、鈴を振って俳句を、アヲミの人々をはげまされました。姓も鈴木である。そこで院号は俳鈴院と進めました。

- ◎ いれごと 後日高浜虚子先生は、花蓑君は良い法号を得られたと側近に申されましたとやら

俳鈴院釈法蓑の納棺もすみ、その頭北面西に光輪寺の住職(二九)は
流転三界中
思愛不能断

棄恩人無為
眞実報恩謝

と、剃刀を取りました。

(4) 吉田弘氏「愛知の文学碑」の文から抜粋

鈴木花蓑（1881～1942）は、半田に生まれ、本名を喜一郎といった。名古屋地方裁判所の勤めながら、名古屋の伊藤左右亭・伊東祐翠・宮野青芭らと俳句のグループを作っていたが、大正4年、家族を伴って上京、虚子の門をたたいた。虚子の膝元で俳句を学びたい一心での転居である。そして、大審院に就職、「研鑽を重ねて、ホトトギス雑詠欄における立派な作家の一人となり、巻頭をも占めるようになって、一時は花蓑時代ともいふべきものを出現する様になった。」（鈴木花蓑句集の虚子序文）

花蓑俳句の特徴は、凝視に徹した写生にあるといわれ、「美しい題材を発見すると、二時間、三時間、あるいはそれ以上の時間凝視していて、句の成るまではそこを立ち去らなかつた」と、秋桜子を驚嘆させたほどであった。彼自身、「写生に一人出かけて行って、ジッと句を案じていると、泣きたいような、家に戻りたいような、哀しい感じに襲われる」といつていたことがあるというが、これは、句作の苦しみを吐露した本心であろう。彼のように凝視に徹すれば徹するほどこの苦しみは大きくなったに違いない。しかし、この客観写生の態度こそ、虚子の提唱したホトトギスの精神であり、その先駆的実践者として、昭和初頭、秋桜子・誓子・青畝・素十ら、四Sにも少なからぬ影響を与え、近代俳句史上忘れられない作家の一人となっている。

三省堂の虚子編「新歳時記」に例句として採り上げられている花蓑の句は、実に50句にも及びはるかに他を圧しているところからも、彼がホトトギスの中でいかに重要な作家であったかうなづけるのである。

次は、「鈴木花蓑句集」中の虚子推賞句である。

「春雨の 上り際なる 水輪かな」	昭和8年
「くらがりに かくるゝ如く 門涼み」	昭和13年
「菊の虻 蕊を抱えて 廻りけり」	昭和14年
「雪落つる 光飛び来ぬ 日向ぼこ」	大正13年

晩年の花蓑は、病弱のため碧南に退隠。永井賓水主宰のアヲミの選を引き受けた縁で、昭和30年（1955）9月、碧南市観光協会の手で棚尾妙福寺に句碑が建てられ

た。

7 鈴木天涯

「碧南いしぶみ集」から抜粋

本名 鈴木市郎、俳号天涯、明治 36 年(1903)3 月 26 日碧南市若宮町に生まれる。
昭和 46 年(1971) 1 月 22 日碧南市汐田町にて没す。

大正 15 年より永井賓水のアヲミに入り、後に三輪一壺に師事し、熱中する。まこも
会員。昭和 22 年頃は「印判篆刻師」を職業にされている。

※ 真菰（まこも）会：アヲミ解散の後、天涯、杜童、虹夢、汴水らが創立した。

8 高木二九

本名高木真敬 明治 23 年(1890) 生 光輪寺先代住職、住職の傍ら俳句の世界に入
る。昭和 18 年よりホトトギス アヲミ同人 昭和 58 年(1983) 2 月 8 日 92 歳にて没
する。

9 長田光浴

本名長田秀吉 明治 22 年(1889) 生 昭和 23 年(1948) 没 眼科医 ホトトギス
系 アヲミ同人

10 斎藤虹夢

本名斎藤弘 明治 37 年(1904) 生 教員 アヲミ出身後ホトトギス同人 三輪一壺
先生に師事後竹島に遊ぶ 現まこも 白桃会員

11 小沢杜童

本名小沢宇三郎 明治 36 年(1903) 生 農協組合長 ホトトギス派 三輪一壺先生
に師事、岡田耿陽先生に学ぶ まこも会員

12 名倉汴水

本名半太郎 明治 40 年(1907) 生 酒販売業 アヲミ出身 まこも会所属

13 其の他の俳人

「市制 20 周年記念 碧南俳句集」に掲載されている棚尾の人

- 西尾芳葩 本名秀孝 大正 13 年 (1924) 生 医師
- 長田有且 本名直行 明治 41 年 (1908) 生 昭和 41 年 (1966) 亡 昭和 6 年頃より蔦堂庵先生を師とし俳句にはげみ俳誌ホトトギス 笛に投句
- 岡田寒苦鳥 本名春一 明治 42 年 (1909) 生 洋品販売 俳号自選 年輪支部会にて手ほどきを受ける。以来白桃 まこも会 みどり会 共進社等にて冷石先生緒先輩の指導を受く
- 名倉ゆき女 本名ゆき 名倉半太郎の母 昭和 13 年 (1938) 亡 アヲミ出身 ホトトギス系
- 斎藤錦夜 本名勤弥 大正 12 年 (1923) 生 会社員 昭和 18 年より句作 ホトトギス系 昭和 32 年までにて目下小憩
- 榊原衣子 本名 大正 15 年 (1926) 生 保母 アヲミ出身 ホトトギス系 まこも会所属
- 杉浦白帆 本名敏一 明治 33 年 (1900) 生 市議会議員 ホトトギス系アヲミ出身 まこも会所属 目下小憩中
- 杉浦諷子 本名フウ 明治 45 年 (1912) 生 主婦 ホトトギス系まこも会員 小沢杜童氏に師事
- 鈴木荷芳 本名顕信 明治 38 年 (1905) 生 ホトトギス系アヲミ同人

1 4 ふれあい館に展示の短冊額 掲出句

永井千秋書 ふれあい館新築記念として同氏が寄贈

- | | |
|--------------------|-----|
| 「烈風や 冬の長浜 片日照り」 | 光浴 |
| 「葎の穂や 刈る間も風の鳴りやまず」 | 秋桜子 |
| 「水鳥の はるか羽ばたく 光かな」 | 手古奈 |
| 「一斉に 水鳥水を 離れけり」 | 素十 |
| 「土手下や 葎かくれたる 冬の水」 | 泊雲 |
| 「返りさく 浜大根や 忘れ風」 | 蔦堂 |
| 「さふらんの 花さく畑の 小春哉」 | 鬼城 |
| 「釣人や 冬枯下の 芦の中」 | たけし |
| 「文机の 前に垂れたる 秋すだれ」 | 霞村 |

「人馬行かず 冬日光れる 野道哉」	二九
「下り鴨 羽ばたき光る 一羽二羽」	賓水
「幹の間に せめて涼しき 星一つ」	風生
「夕暮れの 手摺の下に 秋の海」	耿陽
「とかくして 無月の舟を 出しにけり」	日想子
「時過ぎて 雨月に門を 鎖しける」	蘇南
「拵へて くれし布団に 甘く寝る」	花蓑
「桜餅の 捨て葉を踏んで 客去りし」	土音
「大揺れに 揺るゝ太藷の 蜻蛉かな」	軒石
「芦刈の 向ふの岸に 渉る」	虚子
「ここな子等 今も裸や 秋の浜」	俳小星

1 5 明治期の発句

アヲミが発刊され、棚尾の俳句が盛んになる以前、明治二十余年頃から棚尾には天狗会という文化人のグループがあり、多彩な文芸活動をしていて、その活動の一つに発句があった。

(1) 碧南市史第二巻 俳句から抜粋

明治文化のさきがけをした棚尾の天狗会は「天界詞藻」を収録した。発句というのが、川柳に近いこっけいなものであった。

(2) 高木二九氏「碧南文化」の文から抜粋

ホトトギス以前

天狗会の面々は、発句を始めました。その誌「天界詞藻」第一集 明治 25 年 8 月号を見ますとその課題からして変わっております。ご覧下さい。

蝉	万屋亭万好	「鳴尿しかけて蝉の手柄かな」
鼻天狗	天狗亭法螺	「戸障子をうしろであける鼻天狗」
羽扇	瓢白亭馬溪	「羽扇や棚尾の町でよくうれる」
ラムネ	赤堀孝太郎	「落付た人も泡くふラムネかな」
ラムネ	堂々亭知貫	「初旅にまたも得意のラムネかな」
屁の形	万好	「おさえたとにぎりしめるや屁の形」
屁の形	自讃亭不逮	「尻の形八畳と見えにけり」
夏の海	万好	「葉はなくて哀なりけり夏の海」

夏の海 葬式亭阿棺 「くわねども口の涼しき夏の海」
五ツならべ 法螺 「山だちにかなふ遊びや五ツいし」
日見の宴 法螺 「夜着をきて礼服なぞと日見の宴」

続いてこれ等は、永機、石芝の諸宗匠により、所謂、旧派の俳句を開卷する様になりました。万屋亭万好は賢木原三友、天狗亭法螺は高木法螺、堂々亭知貫は鳥居雲鳥といった様に脱皮しました。それらに仲間十数人と、新しい人も加へて盛になりました。

賢木原三友 「初秋や 片苦かけて かゝり舟」
高木法螺 「身の影をふみつふまれつ盆おどり」

それから二十年、明治末より大正の初年、岡野知十氏主催 俳誌「十風」により、永井賓水氏を先導として、俳句が盛んになっていきました。

大正3年の春、わたしは棚尾青年会の西部々長に選ばれて、俳句部も設けました。それに賓水先生をお招きして、ご指導を願いました。そこで、わたしもお仲間に加わりました。